

研究室紹介



石川県立大学生物資源環境学部環境科学科 土壌環境学研究室（勝見尚也）・大気環境学研究室（皆巳幸也）

石川県立大学は2005年に設立された1学部3学科、学生総数600人ほどの小規模な大学ですが、実践的な少人数教育と、充実した教育・研究リソースに定評があります。一方、本学は手取川扇状地の田園地帯のど真ん中にポツンと立地しているため、徒歩圏内に居酒屋がありません。その上、学内飲酒禁止なので、呑兵衛には酷な環境といえます。そんな本学には大気環境学会に所属する呑兵衛が二人在籍しており、両名とも学内でひととき異彩を放っています（お察しください）。両研究室の研究活動は基本的に別々ですが、学科でも田園資源活用系という同じグループに属していることからゼミや飲み会を合同で開催するなど、交流は盛んに行われています。（文責：勝見）

● 土壌環境学研究室：勝見尚也講師

私のももとの専門は土壌化学で、土壌有機物の生成プロセスや起源をNMRや同位体などから推定し、学位を取得しました。学位取得後、早稲田大学大河内研の助教として採用されたことをきっかけに、研究対象をガラリと変え、大気中フミン様物質に注目して研究を進めました。大河内研に在籍した期間は短いのですが、とても濃密な時間を過ごしました。ただ、その内容はこの場に不適なものが多く、詳細は関係者あるいは被害者の方々に直接お聞きください。

現在所属する土壌環境学研究室は、本学の創設に伴い米林甲陽先生によって設立されました。その後、岡崎正規先生に引き継がれ、2017年4月から私が当研究室を主宰しています。研究室の構成は私と学部生3名+技術補佐員2名という小所帯ですが、「かつん、ハードワークしようぜえ〜」という大河内先生の教えを忠実に守り、皆で早朝から夜中までフィールド調査・室内実験に明け暮れています（注：かつん：当時の私のあだ名）。

現在の研究内容は大気から少し離れ、陸域におけるマイクロプラスチックの動態解明に専念しています。農耕地におけるマイクロプラスチックの発生と海域への移行に関する研究（推進費1RF-2001）では、これまで海洋マイクロプラスチックの発生源として見逃されてきた農耕地に着目し、そこでの流出挙動や微細化プロセスを追っています。ただ、近年マイクロプラスチックは大気にも存在することが明らかとなり、陸域における動態を考える上で見過ごすことができない存在となりつつあります。今後は、大気と土壌間におけるマイクロプラスチックの動きにも着目していきたいと考えてます。



研究室のメンバー：下段の中央が筆者（勝見）

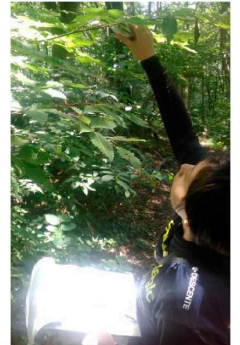
● 大気環境学研究室：皆巳幸也准教授

気象大学校で土器屋由紀子先生の薫陶を受けたのも遙か昔、本学の前身である石川県農業短大に赴任してから20年以上が経ってしまいました。短大では大気・水環境学研究室を名乗っていましたが、現体制となってからは「水」を外して活動しています（その後、水環境学研究室は消えましたが）。

研究室のメンバーは教員1名（私）のほか客員研究員1名、学部4年生が毎年2~3名、たまに院生が1~2名という構成で、研究テーマとしては気象災害、大気汚染、温暖化、雪の結晶成長など諸々の現象を解明したり、それらと生物との関係を調べたりするなど、大気に関係することなら何でもアリで各々が研究を進めています。また、農業用水や河川水の水質など、相変わらず水も扱っています。

昨年度は、なぜか「オゾンと植物」が卒業研究の合言葉になってしまいました。右の写真は、白山麓にあるブナ平という所への登山道に沿ってブナの生育調査を行い、オゾンによる影響の有無を調べたときの風景です。

今年度は新型コロナウイルスの影響で一時は活動も停滞し、もう一つの本拠地 (!?) である富士山へも行けずじまいでしたが、不思議と残っていた白山や立山の積雪試料を引っ張り出したり、ノトヒバによる消臭効果を調べたりと、北陸ならではのテーマで研究を進めていこうと思っています。



白山麓でのブナ調査



(旧) 富士山測候所にて：左端が筆者（皆巳）